令和７年度中国・南昌市への青少年訪問団派遣事業
事後報告書

◆名前：　黒川　翔矢

江西省及び南昌市に滞在中の様子や本事業で得たこと、感想等をご記入ください。
（１，０００字程度）

日本と異なる文化や価値観に直接触れ、国際交流の担い手として成長したいと考え、今回の派遣事業に参加しました。以前の留学で培った中国語を現地で実際に用い、より深い交流を図りたいという思いもありました。

南昌市と高松市は友好都市締結から今年で 35 周年を迎えます。しかし、正直なところ、この事業を知るまでは南昌市や江西省について詳しく知りませんでした。実際に訪れてみると、まずその長い歴史に圧倒されました。滞在期間中、多くの博物館や歴史的な街を巡り、元来歴史的建造物が好きな私にとって、まさに夢のような６日間となりました。目に映るすべてが想像をはるかに超える迫力を持ち、深い文化的営みを感じさせるものでした。博物館に展示されていた古代文明の遺産や、工場で学んだ茶文化の歩みからは、日本以上に長大で厚みのある歴史を実感しました。

現地で参加した国際友好都市青年リーダー対話イベントでは、若い世代に期待される未来社会の在り方や、国際交流に果たすべき役割について多くの意見に触れることができ、自らの使命を再確認する貴重な機会となりました。また、南昌高松中日友好会館では、両市の長きにわたる交流の歩みを学び、積み重ねられてきた友好の重みと尊さを深く感じました。

続いて訪れた景徳鎮市は、世界有数の陶磁器産地であり、博物館や歴史文化街区でその豊かな歴史を垣間見ることができました。さらに、上絵付けやろくろ体験を通じて、伝統文化に自らの手で直接触れられたことは大変貴重でした。その雄大な歴史の流れに、自分自身も参加させてもらったような感覚を覚えました。街歩きや買い物の際には、現地の方々と直接言葉を交わし、人々の温かさに触れることもできました。

今回の派遣を通じて、江西省および南昌市と高松市、さらにはその他の友好都市との間に、想像以上に深い絆が築かれていることを実感しました。それと同時に、私自身もこうした友好関係の持続と発展に、わずかでも貢献したいという思いが一層強まりました。現地でいただいたご厚意を決して忘れず、自らが見聞きしたことや感じた事を、多くの人に伝えていきたいと考えています。

最後に、この素晴らしい６日間を提供してくださった江西省の皆様、温かく迎えてくださった南昌市および景徳鎮市の皆様、本事業をともに盛り上げてくださった派遣団員の皆様、そして関係者のすべての方々に、心より感謝申し上げます。